

# 赤いアンブレラ

すげいふとこはる

## ■登場人物

- 女 1  
男 2 ダンサー、否定の英雄  
男 3 漫才師ツープラトン  
男 4 漫才師ツープラトン、イマイ・シヨウケイ（李小飛）  
八馬<sup>やま</sup>寿次郎<sup>ひさじろう</sup> 侵入者、前説などもやると良い

公園。

音楽 I N。次第に爆撃音。1、登場。赤い傘をさしている。暗転。

2、3、4がいる。2は熱心にダンスのレッスンをしている。

3、4は漫才の練習をしている。1、再び登場。傘は持っていない。

音楽カット・アウト。

1「あの、少しお話してもよろしいですか。」

2、驚く。

1「すいません、驚かせちゃったみたいで。」

2「い、いえ…、女の人に話しかけられたことなんかなかったから…その、ちょっとびっくりしただけで。」

1、微笑んでいる。3、4は興味深そうに成り行きを見守っている。

2

2「な、何でしょう。」

1「いえ、トクベツ、トリワケ、カクベツという訳ではないんですけど…話相手が欲しかったもので すから。」

2「えっ、ということはトクベツ、トリワケ、カクベツにぼくに話しかけたわけじゃないんですか。」

1、微笑んでいる。

3「トクベツ、トリワケ、カクベツに話しかけたわけじゃないのなら僕とお話ししませんか。」

2「僕は話し相手になるのが嫌だといっている訳ではないのです。ただ、あまりに突然のことで、気がついたら『何でしょう』と答えていたんです。」

3「何を言っているの？」

4「いいじゃないか、気の迷いってのは誰にでもあるじゃないの。」

2「誰が迷っているって？」

4は1を指さす。

2 「彼女はわたしを見込んで話しかけてくれたんです。」  
3 「トクベツ、トリワケ、カクベツじゃないって言っているじゃないの。」  
2 「話しかけたということは心の底にトクベツ、トリワケ、カクベツな要素をもっているんです。」

3 「でも、本人は違うって。」  
2 「心の底は簡単には言葉で表現しないもの。」  
4 『『しないもの』なんて断定しているんですか。』  
2 「断定です。心の底から断定です。」  
3 「あなたは女性を蔑視している。」  
2 「…。」  
3 「卑下している。」  
2 「冒涇です。心の底から冒涇です。」  
1 「あの…よろしいですか？」

2, 3, 4は1を見る。

4 「失礼、いつもこんな風なものですから。」  
1 「お友達ですか。」  
3 「いいえ、アカの他人です。」  
1 「随分親しそうな様子でしたから。」  
3 「話のながれでムキになっただけです。世の中にはそんなことが掃いて捨てる程あるじゃありませんか。」  
2 「掃いて捨てる程の中身だといいたいのか。」  
4 「あなたは少しコウフンし過ぎる。」  
2 「コウウンだと。おれは簡単にはうんこをしない。おれは朝起きて便意をもよおしてもトイレにはいかない。朝食をとればより便意が増すことがわかっているからだ。つまり、うんこを朝食後までとっておくわけだ。」  
3 「おーデリシヤス！フアンタスティックな発想だ。つまり二回トイレに行く可能性のあるところを一回で済ますという訳だ。」  
4 「(1に)とここでどんなお話なんでしょう。」

2, 3も1を見る。

1 「私にはとても好きな人がいました。」  
2, 3, 4 「…。」

1 「はじめて、彼と出会ったのはメコン川の船の上でした。」

3 「メコン川？」

1 「彼は大きな女物の帽子を被りサンダルをはいて、ビシツとしたスーツを着て、赤い傘をこうくるっと回していたの。(傘をくるくる回すポーズ)『どうしてそんな格好しているの?』って聞いたたら『おれさ(傷だらけの天使)のショーケンが好きで、あいつはいつもこんなアンバランスな決め方をしていただろう』って。わたしはよくわからないから『へえー、そう』って言いかけて、ふっとその人の顔を見たら少し緑がかかったとても綺麗な瞳をしていたの。わたしはすぐにその人を好きになってしまいました。」

3 「一目惚れ？」

2 「いい話ですね。」

1 「ありがとう。それからわたしたちは頻繁に逢うようになりました。彼はいつも赤い傘を持っていて、わたしは遠くからでも赤い傘を見かけると『おーい、こっちだよ』なんて…。」

1, 暗い表情になる。

2 「どうしたんですか?」

1 「だけど…。」

2 「だけど?」

1 「その人はわたしが一M以内に近づこうとすると必ず距離をあげ、その赤い傘でわたしをこう指すの。(指す真似をする)それがたとえほんの数センチでも近づくと測ったように距離をあげ、その赤い傘をこう指すの。(指す真似をする)『わたしのことが嫌いなのか?』って聞くと、わたしの方をじっと見て『そうじゃない。ぼくにはぼくの考え方があるだけだ』って言うの。『でも、その態度でわたしのことが嫌いじゃないと言ってもとても理解できないわ』って言ったら、傘をこうくるっと回して私に投げキッスをするの。」

4 「その人はきみのことが嫌いじゃないと思う。」

1 「やっぱりそう思う?」

3 「どうして?」

4 「投げキッスするからさ。」

3 「そうじゃないよ。そいつが一M以内に近づかないってことを問題にしているんだぞ。」

1 「その人は傘をこうくるっと回した後、じっとわたしの顔を見てこう言うの。『男には女にはわからない、悲しい性があるんだよ』って。」

2, 3, 4 「…。」

1 「その人はいままでに一M以内に近づいた人は三百六十五人いて、その全ての人と関係を持ったんだって。ある時、自分でもそれに気づき、だんだんとそれが心の負担になってきた。記録が途切れたらどうしようって。」

2 「わかるよ。その気持ち。ぼくも小学校のころ毎日登校前に家の壁に向かって軟式ボール

を百球投げて遊んでいたんだけど、たまに朝寝坊して、それでも百球投げなきゃいけないと思っ  
てあせって、あせって……」

4 「ぼくも芝居を三十六ヶ月連続で観ていたんだけど、いや、最初から、毎月観ようと思っ  
ていたわけじゃないけど、ふっと気がついたらそんな状況だったものだから、だんだん意地  
になってきて……ところが先月、とうとうその記録が途切れて、その時の気持ちといったら、  
もう一回人生をやり直したいような、なんとも言えない気持ちだったなあ。」

3 「おまえたちは黙っている！大体、おまえは誰なんだよ。」

2 「ダンサーです。」

3 「ダンサー？何でダンサーがこんな公園に、しかもそんな格好をしているんだよ？」

2 は確かに作業服を着ている。

2 「いけませんか？」

3 「いや、いけなくはないけど、やっぱり変だろう。」

2 「あなたは？」

3 「漫才師だよ。ツープラトンっていうんだ。」

2 「じゃあ、そちらは相方？」

4 「はい。相方です。どうしたんですか？」

2 「（あたりを見渡しながら）なんか落ちはないんですか。」

4 「いや、その通り相方ですから。」

2 「漫才師だったらそんな時でも何かとぼけたことを言うとか。とぼけた顔しているじゃな  
いですか。」

4 「はあーん。漫才師に向いてないって言いたいんですね。」

2 「いや、そこまでは言っていないけど、何かそういうセンスってあるじゃないの。」

1 「その人は……それに耐えかねて、ある時M以内に近づいた女性と関係をもたなかった  
の。」

4 「そうしたら？」

1、手首を曲げる。

1 「手首が変形したんですって。」

3、4は笑いをこらえようと必死になる。2は何故だか真顔にな  
る。

4 「あのう……すみません。そんなことは医学的に可能なんでしょうか。」

1 「可能です。」

3, 4 は笑いがこらえきれなくなる。

1 「わたし、見たのです。」

3、4 「…。」

1 「彼が苦悶しているのを。」

2 は何故だか格好つけている。

1 「ええ。彼はいつものように大きな女物の帽子を被り、サンダルを履いて、ビシっとしたスーツを着て、海に向かって自分の手をかざし、いたわるようにその手をこうゆっくりさすっていたの。」

4 「あのう…その手って何でしょう？」

1 「私は彼がそうして海に向かって苦悶しているのを何度も見たんです。」

3 「だからその手って何？」

1 「ええ。そうやって海に向かって苦悶しているのを…。」

1 は寂しそうに後ろを向く。

3 「(やや激昂して) だからその手って何だよ。大体、その女の人はどうして彼の半径1M以内に近づいたという保証があるんだい？その女の人が彼の半径1M以内に近づいて、それで彼の手が変形したのならあなたの話は理解できるけど、その彼ってのも、手が変形するってのもまるで実体がないじゃないか。」

1 「あなたは随分、乱暴な人ですね。」

4 「(3に向かって) まあいいじゃないの。中にはそんな奴もいるかもしれない。」

3 「いるわけねえじゃねか。おれは女の半径1M以内に近づいて、その全部とやって、はたまた、やらなくて手が変形した男と…:そんなあんたのいう奇怪な野郎のことを真剣に考えているんだ。それを頭ごなしに乱暴な奴とはどういうことだ！」

4 「やめろよ。そんな男に惚れた娘さんの気持ちを察してやれよ。」

1 「ありがとう。そう言っていたらけると少し気持ちが落ち着きます。彼は赤い傘をこうくると回して『赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を表す』って。」

3 「(悔しそうに) 手って何だよ！」

4 「もう止しましょう。」

1 「そうですね。」

2 「(赤い傘)の伝説ですね。」

- 3 「〈赤い糸〉じゃないのか。」
- 1 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を…。」
- 2 「つまり、性欲を抑えると手に変形すると。」
- 3 「馬鹿か、おまえ。」
- 2 「恋をしてもかなわない…。」
- 3 「ちよつと待てよ。そいつはいつも赤い傘を持っていたわけだろう。なぜ、そんなことにいままで気がつかなかったんだよ。」
- 4 「あまりにも身近にあるものには思いが及ばないものですよ。」
- 3 「離れろ、離れろ。」
- 1 「それから彼はわたしの顔をとても寂しそうに見つけていました。そして、その緑がかつた瞳を伏せて、申し訳なさそうに私の方を気にしていました。」
- 2 「それでその人とはどうしたんですか？」
- 1 「別れました。」
- 3 「やっぱりね。」
- 1 「そして、誓ったのです。」
- 3 「何を？」
- 1 「男の人に半径一M以内に近づくのは止そうって。」
- 3 「でも、あなたは充分近づいていますよ。」
- 1 「何も感じない人はいいんです。」

3, 落ち込む。 4, なだめる。

- 1 「別れたその人は大きな女物の帽子を被り、サンダルを履いて、ビシツとしたスーツを着て、海に向かって自分の手をかざし、いたわるようにさすっていたの。」
- 3 「まったく考えさせられる話だぜ。よう、ダンサー。おめえはなんでこんなところできさくさしているんだよ。」
- 2 「恋に疲れたのです。」
- 1 「あなたも？」
- 2 「ええ。」
- 1 「相手は…女？」
- 2 「あたりまえじゃないですか。そのころわたしはまだバレエスクールの初等科に入ったばかりで…といっても、もう三十になっていましたけどね。」
- 3 「三十？三十でバレエをはじめたの？」
- 2 「ええ。」
- 3 「その前は何をしていたの？」
- 2 「競馬のジョッキーです。」

- 3 「競馬のジョッキー？競馬のジョッキーが何でダンサーになるんだよ。」
- 2 「失恋したからです。」
- 1 「相手は…女？」
- 2 「いえ、馬です。」
- 3 「何を言っているんだ、こいつは！」
- 2 「同様にオトメノサルマタという馬がいました。」
- 1 「オトメノサルマタにあなたの愛した馬が盗られてしまったんですか。」
- 2 「ええ…自信はあったんですけどね。」
- 1 「馬が馬を愛するのは自然なことだと思うんですけど…。」
- 2 「何せはじめて振られたものですから。どうしていいかわからずに気がついたらオトメノサルマタの蹄鉄をはずしてケツの穴に突っ込んでいたのです。」
- 4 「ああ、それで馬主連合会から干されてしまったわけですか。」
- 3 「ジョッキー組合は何も言わなかったのか。」
- 2 「ええ、自業自得だって。わたしは自暴自棄になりましたけど。」
- 3 「それでどうしてダンサーに。」
- 2 「自己表現するには自分の肉体を使うのが一番てっとり早いと思ったんです。」
- 4 「でも、三十からはじめてダンサーになれるの。」
- 2 「なれると思いました。わたしはもともと拳法の選手だったんです。」
- 1 「ジョッキーじゃないの？」
- 2 「いえ、その前です。」
- 3 「何だよ、お前。ころころ変わりやがって。」
- 2 「あのハードなフィットネスに比べればまるで子供のお遊戯に思えたのです。」

2 は寂しそうな顔をする。

- 1 「どうしたんですか？」
- 2 「子供のお遊戯ではありませんでした。いえ、それどころか長い年月を積み重ねてはじめて表現できる最高の肉体芸術だったのです。挫折しました。完全に挫折しました。わたしは憂鬱になりました。レッスンは栄の明治屋の上にあります。車を中日ビルの裏の三十分百円のところに止めてそのまま中日ビルの脇からサカエチカに降りて…すぐそこに本屋があるんです。そこでもいつもダンスマガジンを立ち読みするんです。マラーホフやシルビ・ギエムの美しい肢体がそこに載っているのです。ギエムの美しさといったら…上半身はまるでお姫様で、下半身は全ての細胞が意志を持ってうごめいているようなもの。凄く強靱でしなやかな筋肉をしています。それからわたしはただ淡々とサカエチカを明治屋方面に向かって歩いていくのです。そして、クリスタル広場を過ぎたあたりからわたしの足は硬直し始めるのです。怒られるのはわかっています。毎日毎日怒られるのです。先生は二十代前半



の草刈民代に似たい女でした。そのいい女に毎日毎日怒られるのです。

何ですかその足は！ピルエットはもつと軸をしつかりさせなきゃいけないでしょ！ロンデ・ジャンプは必ず一番を通りなさい！何ですかその足は！来る日も来る日もそうやって草刈民代に似たい女に怒られるのです。サカエチカがどんつきになったところに女物の洋服を取りそろえた雑貨屋があります。わたしはいつもそこに立ちよって洋服を一着買うのです。なるべく安くて丈夫それで形がいい奴を……。草刈民代に似たい女にあげようと思って買っているではありませんが、無意識のうちにその肩幅や乳房のラインを意識していたような気がします。そして、そこで買い物を買えどもうやり残したことはないような気持ちになります。サカエチカから丸栄にあがって行く階段がまるで死刑台に向かっていく最後の階段のように思えてくるのです。」

1 「草刈民代って誰？」

2 「いや、いいんです。」

2 は立ち上がる。

2 「わたしはいまでも暇さえあればこうして（ピルエット〈回転〉の真似をする。）レッスンを励んでいるのです。芸術劇場大ホールがわたしの夢なのです。そのためには例え『くるみ割人形』のねずみだろうが、『白鳥の湖』のラッパ吹きだろうと何でもかまいません。そのためにこうしてこうしてレッスンを励んでいるのです。そして、そんな時にはいつも目の前に草刈民代に似たい女がいるような気がするのです。」

1 「何かはじめて出会ったのにとってもそんな気がしません。そんな話をいつか……ずっと以前に聞いたことがあるような気がします。」

4 「ぼくも今そう言おうと思っていましたね。」

1 「あなたがたは漫才師だと言っていましたね。」

3 「ツープラトンっていうんだ。」

4 「ぼくは相方。」

1 「どんな漫才するの。」

3 「社会派だよ。時事問題を的確に入れていくんだ。」

1 「見せて。」

3 「只じゃ嫌だよ。」

1 はおもむろにたちあがり3に頬ずりする。

3, 4 立ち上がり漫才を始める。3は竹刀を持っている。

3, 4 「相撲。」

3 「きみが今日からうちの部屋に入門することになった新弟子の鬼頭くんか。」

- 4 「はい、よろしくっス。」
- 3 「学生相撲で優勝経験があると聞いたるが、その割には随分、ちっちゃいなあ。」
- 4 「はい、チビッコ光線あびちゃって。」
- 3 「誰も知らねえよ。」
- 4 「はい、一、二、三、メーン。」
- 3 「剣道になつとるやないか。」
- 4 「だって、竹刀もっているじゃないですか。」
- 3 「違う。まあ、いい。うちは稽古が厳しいので有名だからな。びびびし、鍛えるから覚悟するように。」
- 4 「はい、一、二、三、メーン。」
- 3 「剣道じゃないってば。」
- 4 「男だつたら武器を捨てろ。」
- 3 「鍛錬の道具だ。題して日本精神注入ボー。」
- 4 「(竹刀を見て) ボーはカタカナなんですか。」
- 3 「ボーツとしているからよ。そんなことは関係ねえだろ。ところで、君は何でうちの部屋に入ろうと決めたんだね。」
- 4 「ちんこが腹一杯喰えるからっス。」
- 3 「ちんこって、おまえ。」
- 4 「ウンコっス。」
- 3 「チャンコだろう。」
- 4 「ちゃんといえるじゃないですか。」
- 3 「すいません、って何でおれが謝らなくちゃならないの。」
- 4 「それが人生というものだ。」
- 3 「馬鹿野郎、おまえ本当に相撲がやりたいのか。」
- 4 「もちろんです。」
- 3 「何故だね。」
- 4 「ウインタースポーツが得意だからっス。」
- 3 「相撲はウインタースポーツじゃねえぞ。相撲ってのはなあ、格闘技だ。男と男が裸でぶつかり合う…。」
- 4 「ホモ。」
- 3 「違う。」
- 4 「ああ、エキサイトするスポーツ。」
- 3 「そうだ。」
- 4 「血湧き、肉おこる。」
- 3 「おごって、どうすんだよ。もういい。とにかく、きみとは契約することになつとるから、あとは、どうやって金を支払えばいいのか、今、決めたいんだが。」

- 4 「スイス銀行の口座に振り込んでください。」
- 3 「スイス銀行っておまえ、ゴルゴ13じゃないんだから。」
- 4 「二百万でお願いします。」
- 3 「二百万！高い、高すぎる。」
- 4 「じゃあ、二百万。」
- 3 「えらい、安なったなあ。おまえ、どういう金銭感覚しているんだ。わかった。じゃあ、スイス銀行の口座に二百万振り込んでおくから。」
- 4 「わーい。わーい。」
- 3 「二百万ぐらいではしゃぐなよ。ところで、きみ、出身は？」
- 4 「神戸っス。」
- 3 「じゃあ、出身地にちなんだシコ名がいいなあ。」
- 4 「タンク山。」
- 3 「ダメだ。禁句だ。タンク山じゃあ、お客さん寄りつかないぞ。」
- 4 「ダメっスか。」
- 3 「当たり前だ。おまえ、もつと、まじめに相撲に取り組みなさい。こう見えても、ワシは関脇までいったんだ。きみだって強くなって有名な力士になりたいだろう。」
- 4 「ハイッ。」
- 3 「役はどのあたりを狙っとるんだ。」
- 4 「白雪姫っス。」
- 3 「学芸会じゃないんだから。」
- 4 「じゃあ、南の横綱。」
- 3 「東か西しかねえよ。」
- 4 「南野陽子。」
- 3 「なれねーよ。南はないって言っているだろう。さっきからおかしなことばかりくっちゃべりやがって、学生相撲優勝ってウソじゃねえのか。」
- 4 「本当っスよ。僕、すごい、得意技持っているのですよ。」
- 3 「ほう、どんな技だ。豪快に二丁投げとか突き倒しとか…。」
- 4 「いえ、将棋倒しっス。」
- 3 「ねーよ、そんなもん。」
- 4 「もとい、行司倒し。」
- 3 「行司倒してどうすんだよ。あんな爺さん誰でも倒せるんじゃないやねえか。」
- 4 「いや、結構手こずったよ、あの爺さんには。」
- 3 「じゃあ、おまえ、弱いんじゃないやねえか。怪しいなあ、ちょっと立ち合いを見せてみるよ。」
- 4 「いいですよ。そこ迄言うのなら、まずは土俵入りから。」

4、土俵入り。

3 「おお、型はまともだなあ。(と、うしろを向いた隙にカンチョーされる) いたっ！何するんだー。」

4 「おっさんです。」

3 「ごつつぁんですだろう。確かにワシはおっさんだけれども。」

4、しきりに入る。

3 「腰の位置が高い。」

4、今度は座ってしまふ。

3 「座ってどうすんだ。」

4、こんどは片足を上げる。

3 「犬のシヨンベンじゃないんだから。よし、そのままさつき言っていた、得意技を見せてもらおうか。(と、構える) 」

4 「いいですよ。はっけよしい、怒った。この野郎。」

3 「怒ってどうすんだよ。」

4 「もとい、はっけよしい、のこった。(と、カラテチョップ) 」

3 「これはプロレスの技じゃねえのか。」

4 「効き目がない時はヘッドロック。(と、ヘッドロック) 」

3、のたうちまわっている。

4 「凄いで意技でしょう。」

3 「つかえねえよ。おまえ、相撲をナメとるな。相撲は国技だ。アマテラスオオミカミからの古い歴史と伝統があるんだ。」

4 「さすが、日本。」

3 「だろう、わかったか。」

3 「捨てちゃってどうすんだよ。それを言うなら捨てたものじゃないだろう。ふざけた野郎だ。もう頭に来た！私とその根性を叩き直してやる。真剣勝負だ！」

4 「いいですよ。僕は学生横綱ですからねえ。ケガしても知らないよ。」

3 「それはこっちのセリフだ。来い！」

- 4 「はっけよーい、のこった！（と、地面を叩き紙相撲のマイム）」
- 3 「（調子を合わせながら）紙相撲じゃねえかよ。」
- 3, 4 「ありがとうございます。」

3, 4 もとに戻る。

- 2 「どこが社会派なんだ。」
- 3 「ほれ、タンク山とかさ。」
- 2 「ただ言っているだけじゃないの。」
- 3 「おれは社会派だと思っけどなあ。（1に）どう思う？」
- 1 「社会派です。」
- 2 「どこが。ねえ、どこが。」
- 1 「今のテレビでも素人をダシにつかって笑いをとるような芸人は許せません。芸人には芸人にふさわしい笑われ者しか芸人になる資質がないと思っています。」
- 2 「何を言っているの。」
- 3, 4 「笑われ者、笑われ者。」とご満悦
- 2 「あなたがたはもともとどういう関係なのですか？」
- 4 「ぼくたちホモなんです。」
- 3 「おい、簡単にばらすなよ。」
- 4 「いいじゃないか。気の置けない人たちだし…。」

4 は3に寄り添う。

- 1 「そうなんですか。でも、こうして私たちが出会ったということは何か意味のあることかもしれません。」
- 3 「本当に…：今日はじめて出会ったのにとってもそんな気がしません。」
- 2 「何か旧友に再会したような…。ここでこうして話をしていれば少しは気持ちが落ち着くかもしれません。」
- 1 「そうですね。お互いに悩みを抱えている者同士。何か分かり合えるかもしれません。」
- 4 「そうですね。ここでゆっくりいろいろなことを語り合うのもいいじゃないですか。」
- 1 「（3, 4に向かつて）あれ、そういえばあなたがたはどうしてこんなところにいるんですしたっけ。」
- 3 「ぼくたちも恋に疲れたんです。いや…むしろ愛することに疲れたんです。」
- 4 「それで熱心に話し合っていたんです。」

と、再び4は3に寄り添う。

1 「わかるような気がします。そんな時はほら、この傘をさして、こうくると回せば少しは気持ちが悪くなりますよ。」

1 は傘をくるっと回した後、4 に手渡す、というマイム。

4 は同じように傘をくるくる回す、というマイム。

1 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を…。」

2 「そういえば、このフリーズも以前どこかで聞いたことがあるような気がします。」

4 「あなたもですか。実は、ぼくも今そう言おうと思っていたところです。」

突然、爆撃音。稲妻がはしる。

声「ギャー！」と走り去る男（八馬が演じる）

1, 2, 3, 4 顔を見合わず。

3 「何だ、今の奴は。」

1 「何かあったんですか。何か聞こえませんでした？何かあると鳥は飛び立ちます。」

3 「あいつは鳥なのか。」

2 「飛行機が墜落したとか。」

3 「まさか。」

4 「豹ですかね？」

3 「ここは公園だぞ。」

4 「蛇かな。」

2 「もっと大きいでしょう。」

1 「人間じゃないかしら。」

2 「ぼくたちの話を立ち聞きしていたのかな。」

4 「それより今のは悲鳴に聞こえたぞ。どこかケガでもしたんじゃないのかな。」

1 「様子を見に行った方がいいんじゃない。」

3 「でも、強盗だったらどうする。」

2 「ここでこんな風に人の話を立ち聞きしている人が強盗な訳ないじゃないですか。」

3 「わからないよ。いろんな奴がいるからな。」

1 「ちよっと、見てきてもらえませんか。」

3 「え？どうしてぼくの方を見て言うのですか。ぼくは…その…心臓の…弁が…弁が…。」

一同、固唾をのんで見守っている。

3 「弁髪禁止令！」

2 「何を言っているの。」

1 「あなたは一見、大胆そうに見えて、実はとても小心なのですね。」

3 「一見、そういう風に見える人間ほど、猜疑心が強いのです。」

4 「ぼくが見てきます。」

4、脱兎のごとく森の中に駆け込んでいく。

3 「おい、待てよ。」

1、2は3の方を呆れた顔をして眺めている。

3 「おれがよせつていうのに。みんな行かないのなら、じゃあ、ぼくが見に行つてこようかな、なんて、そんな人の気持ちもわからずに馬鹿だなあ、あいつ…。」

1、2は3の方を相変わらず呆れた顔をして眺めている。

1 「行っちゃいましたよ。」

2 「もう帰つてこないかもしれませんよ。」

3 「そんなことがある訳ないじゃないか。おれとあいつの関係でそんなことが考えられる訳ないじゃないか。」

1 「どうして、あなたたちは漫才をしようと思つたのですか？」

3 「もともと、二人とも劇団にいたんですよ。おれもあいつも志は高かったんだけど、層が厚くてね。準劇団員にはなれたんだけど、劇団員になる時に落とされちゃつて。でも、劇団にいる時はそこが最高つて思つていたけど、追い出されちゃつたら急に気持ちちが冷めちゃつて…。いままでの情熱は何だつたんだらうつて。」

2 「価値観が変わつたということですか？」

3 「そんな感じだね。」

1 「わたしもそういうことありましたわ。前につきあつていた人が…。」

2 「また、ですか。あなたのつき合つていた人が相当変わった人だつていうのは充分お聞きしました。」

1 「いえ、その前につき合つていた人なんですけど、あたしが卵焼きを焼いたら『こんなもの食えるか』つて、卓袱台をひっくり返す星一徹。」

2 「何を言っているの？」

- 3 「卵が嫌いだったんじゃないの。」
- 1 「いえ、わたしは卵焼きっていうのは白身と黄身をごちゃ混ぜにして、エイツとばかりに焼くものだと思っていました。」
- 2 「それはおかしい。あなたの言いたいことはわかりましたよ。その星一徹が白身と黄身を分けて焼けて言ったんでしょ。」
- 1 「ええ。」
- 3 「ぼくも彼の意見に賛成だな。」
- 2 「そうだよね。」

2と3はガツチリ握手をする。

- 1 「でも、それは普通、目玉焼きって言いません。」
- 2, 3 「…。」
- 1 「ともかくわたしはとても傷つきました。」
- 2, 3 は顔を見合わせながら気まずそうにしている。

- 2 「彼は何て？」
- 1 「『これは価値観の問題だ。肌の白いの黒いのと同じように持って生まれたものだから変えることはできない』って。」
- 3 「価値観ねえ。そういえば、おまえ、洋式便所で小便する時、便座上げて立ってする？」
- 2 「する。」
- 3 「あいつ座ってするって。」と森の方を指さす。
- 2 「あいつ？どうして？」
- 3 「ホモだから。」
- 2 「おまえもホモだろう。」
- 3 「ホモにもボケと突っ込みがあるんだ。」
- 2 「ボケ？」と森の方を指さす。
- 3 「うん。」と頷く。
- 2, 3 「失礼しました。」と1に謝る。
- 3 「でも、卵焼きに関してはその彼に賛成だな。」
- 2 「モダンな生活をしている人はそういう焼き方をするって聞いたことがありますよ。」
- 1 「悪かったわね。どうせわたしはモダンな生活はしていないわよ。」
- 2 「怒らなくなっただっていいじゃないですか。」
- 1 「モダンな生活をしていないからわたしの価値観はおかしいって言いたいんでしょう。」
- 2 「まあ…そういうことですけど。」



1 「怒りますよ。」

3 「怒らなくいでください。」

1 「ふざけないでください。」

2 「要するにモダンな生活をすればいいんですよ。」

1 「…。」

2 「統計的にみて、白身と黄身を分けて焼く人にモダンな生活をしている人が多いのであれば、モダンな生活に自分の身を置けばいい。そう思いませんか？」

3 「全くその通り。あなたは競馬のジョッキークラウンサーになったエキサイティングな人なのに論理的なのですわ。」

1 「でも、自分でモダンな生活を送ろうとしても簡単にできるものじゃないわ。」

2 「あなたはこうしてそんなに悲観的なのですか。」

3 「簡単なことですよ。金を儲ければいいのです。競馬・競艇・競輪・オートレース！」

1 「全部ギャンブルじゃないですか。」

2 「ぼくは回収率からいったら、やっぱり競艇を勧めるなあ。」

1 「競馬じゃないの？」

2 「出走艇数が六艇でしょう。組み合わせにしたってたかがしれている。その点、競馬はフルゲートで十八頭もいる。組み合わせにしたら百五十三通りもある。当たり前じゃせんよ。」

(3に) あなたはお金持ちですか？」

3 「いや。」

1 「それごらん下さい。何か話が変わる方向にいつてしまったみたいけど…何を話していたんでしたっけ。」

3 「卵焼きだよ。」

1 「そうそう…卵焼きの何？」

3 「焼き方がどうのこうの。生活がモダンだの、それは金持ちじゃないだの、いろいろあれやこれやと。」

2 「もともとぼくたちの話に通のテーマなどなかったじゃないですか。たまたまここに居合わせているんなことをまるではつれた糸をほどいていくみたいにケンケンガクガクやっているだけじゃないですか。」

1 「たわいもないことなのですか？わたしにはとても貴重な時間に思えます。まるで旧友に再会したような。」

2 「そうだ…でも、急に止まってしまった。」

1 「金儲けの話をしたからですわ。(ポツリと) 金儲けは美德ではありませんわ。」

1, 2, 3 再び押し黙る。

2 「それにしてもあなたの相方は遅いですね。本当にどこかに行ってしまったんじゃないで

すか。」

「ギャー」と駆けていく4，八馬。

3「あ、あいつだ。」と駆けていく。

2「何だ、あいつらは。」

再び駆けて来る4，八馬。そのまま、花道を突っ切って奥の方へ駆けていく。3，後を追う。

2「あ、鳥が飛んでいく。」

3はあわてて駆け戻って来る。

2「おい、もう行っちゃったよ。」

3「すまん。ちよつとオットセイの真似をして…（と、オットセイの真似をする。）いやいや、あざらしだ。」

2「え?」

3は自分の首のあたりを指している。

3「あざらしい。」

1，2は絶句。腰砕けになりそう。

3「いや、いや、とんでもない奴に出会ったんだ。」

2「おー、飛んでもいねえ奴。」

1，3「…。」

3「そいつはこの公園に住む主、キング・オブ・キング!」

2「キング・オブ・キング!何、それ?」

3「いや、本人がそう言っていたんだ。」

2「自分でキング・オブ・キングって馬鹿じゃないの。」

1「シニールレアリスムって分かります?」

2「超現実主義ってやつでしょう。」

1「現実離れしているの。」

3「確かにヨガの行者みたいだったなあ。」

1 「その人が何て？」

3 「『おれはこの公園に住む主、キング・オブ・キングだ。』」

2 「それはわかったよ。そのキング・オブ・キングが何か言っていたのか。」

3 「『おまえは何者だ。』」

1 「それから？」

3 「名乗る程の者じゃありませんが、ツープラトンの突っ込みをやっております。」

2 「それはわかっているよ。それで、そいつが何か言っていたのか。」

3 「『よかつたらこちらに来ませんか。』」

1 「ヨガの行者が？」

3 「『丁度、酒も用意してあるし。』」

2 「何だよ、それ。」

3 「いや、今ぼくたちは取り込んでいて、とてもそんな状況にないのです、って言うと『それならわたしがそちらに伺いましょう』って。」

2 「じゃあ、こっちに来るのかよ。」

1 「でも、さっきのは悲鳴じゃなかったの。」

3 「ああ、あれはアクビだって。」

2 「何だよ、おまえは。行ってすぐ帰ってきてそれだけの会話が出るわけじゃないじゃないか。」

3 「以心伝心！」

1 「でも、そのキング・オブ・キングさん、本当にこっちに来るのかしら。」

2 「来なくていいよ、そんな奴。」

3 「まあ、いいじゃないの。旅は道ずれ世は情けって言うじゃねえか。」

2 「おれたちは旅をしているのか。」

3 「何てたってこっちには百万かけたセットがあるんだ。」

2 「どこにそんなものがあるんだよ。おまえおれにケンカ売っているのか。」

1 「いいじゃないの。旅は道連れ世は情け。」

2 「旅じゃないってば。」

3 「セットが欲しい。いっぱい欲しい。」

2 はお手上げのポーズ。

1 「それにしてもあなたの相方は遅いですね。」

2 「おまえに愛想つかしてどっかに行っちゃったんだよ。」

3 「それはねくずらぜ。あいつに限ってそれはねくずらぜ。あいつとおれは糟糠の妻じゃなくて、夫じゃなくて、よくわかんねえけど…それはねくずらぜ。そのうち『いや、どっさ』って現れるに決まっているはずだ。」

4、花道より登場。大きな女物の帽子を被り、サンダルを履いて、ピシッとしたスーツを着て、背中に赤い傘をしょっている。

4 「どうも。」

1, 2, 3 「どうも。」

4 「キング・オブ・キングです。」

1 「女です。」

2 「ダンサーです。」

3 「ツープラトンです、って、何だよおまえ、どこに行っていたんだよ。」

4 「キング・オブ・キングです。」

間。

1 「また、会話がピタリと止まってしまいましたね。」

2 「今回は理由が明らかですよ。」

4 「わたしが止めたとしても。」

3 「おまえが止めたんだよ。誰が見たってお前が止めたんだよ。」

4 「わたしが会話を止めてしまったのですか？まるで黄河の水量のような質感の高い込み入った会話をわたしが止めてしまったのですか。」

3 「何を言ってるやがるんだ。ふざけてないでここに来い。それに何だ、そのカツコウは。まるで似合わねえよ。」

4 「わたしが止めたのですか。」

1 「はい。」

4、花道を脱兎のごとく駆けて来る。

2 「お、来るな、こんちくしょう。」

4、のたうち回っている。

3 「もともとたいした話しじゃないから気にするな。」

1 「また、そんなことを言う。私は真剣なのです。あなたは真剣じゃないのですか。」

3 「わたしも真剣です。心の底から真剣です。しかし、こいつがいては真剣に話ができないからどこか行けって言えますか？」

4、ぴたりと止まり立ち上がる。

4「やはり、わたしは邪魔なのですね。」

1, 2, 3「…。」

4「失礼。」

4は背中を見せて去って行こうとする。

1「ちょっと待って下さい。」

4、立ち止まる。

1「その傘は…どこで。」

4は背中からパツと傘を抜き取る。

音楽 I N。

2「何？西部劇。」

1「前にどこかで見たような気がします。」

4、傘を開き高くかざす。そして、くるくる回す。

3「何だよ、それ。新ネタ？」

4はその傘を1に手渡す。1は傘をくるくる回している。

音楽 I N。後ろの幕が上がり、背後に赤い傘が所狭しと並べられている。中央に小径（階段）があり、そこに、白い花が咲いている。

1「その人は大きな女物の帽子を被り、サンダルを履いて、ビシツとしたスーツを着て、赤い傘をこうくると回していたの。（傘をくるくる回すポーズ）『どうしてそんな格好しているの？』って聞いたら『おれさへ傷だらけの天使のシヨーケンが好きで、あいつはいつもこんなアンバランスな決め方をしていただろう』って。わたしはよくわからないから『へえー、そう』って言いかけて、ふっとその人の顔を見たら少し緑がかったとても綺麗な瞳をしていたの。わたしはすぐにその人を好きになってしまいました。」

役者紹介。

4 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。そして、雨にあたると通り過ぎた過去が見えてくるのです。」

2 「その声は、あの廬溝橋の小年兵、李小飛！」

4 「お久しぶりです。〈否定の英雄〉殿！」

2 は 4 を睨む。

2 「どうしておまえがここにいる。」

4 「あなたはあのアリランの花を踏みつぶしていきました。」

2 「…。」

4 「あれから随分、長い時間が経ちました。」

2 「…。」

4 「わたくしはあらゆる所作に敏感なのです。」

2 「どうしておまえがここにいる。」

4 「あなたがここにいるからです。」

2 「おまえは亡霊か。」

4 「いえ、ちゃんと自分の足で立っております。否定の英雄殿。」

2 「それを言うな！」

2 は 4 を睨む。そして、目をそらす。

4 「わたくしの母親はアリランの咲き誇るなか…太陽がようやく昇りかけた頃、まるで日の中にかき消されるように軍服を着た男に連れ去られていきました。そして、一瞬、立ち止まり、わたくしの方を振り向いて『大きくなったら軍人になれ。そして、女にだまされるな。』と言いました。わたくしはまだ眠い目をこすりながら母親の後ろ姿を眺めていました。母親の大きな背中は祖国の国旗よりでかく見えました。」

2 「おれはおまえの母親を連れ去った。」

4 「わたくしの人生がはじまりました。」

2 「言葉では説明できない苦悩がハードルのようにおれたちの前に立ちふさがったのだ。」

4 「ハードル？ハードルと感じたのがせめてもの良心だと思うのですか。」

2 「戦後五十年、おれたちはその価値観に苦しんだ。目の当たりにしたおまえの祖国の苦しみに頭を垂れ続けたのだ。」

4 「わたくしは別に苦しいと感じたことはありません。苦しいという偏見を日本人がおしつけたのです。それが優しさだと思ったらドンガメに落として埋めてしまえいい。」

- 2 「おまえは何故、おれを撃たない。」
- 4 「戦争は終わったからです。」
- 2 「おれはおまえの母親を連れ去った。何故、撃たない。」
- 4 「戦争は終わったからです。」
- 2 「殺人者になるのが嫌なのか。」
- 4 「あなたの目にうつる自分の姿がとても汚らわしく思われます。わたくしにはまだ心の中に良心があります。」
- 2 「戦争に良心がいるのか。戦うことを傍観するのか。」
- 4 「人が決めたルールは間違いを繰り返します。」
- 2 「正誤の判断は個人で決めるのではない。その社会が決めるのだ。」
- 4 「社会の間違いに個人は関与できないのですか。」
- 2 「おまえの言っているのは机上の屁理屈だ。」
- 4 「正論です。美しいと感じることもそれを醜いと押しつけられたら美しいと感じてはいけないのですか。」
- 2 「正論でメシが喰えるか。」
- 4 「死にはしません。」
- 2 「正論で腹が膨れるか。かすみを喰って生きていけるのか。」
- 4 「強くなければ生きていけない、優しくなければ生きていく資格が無いと高倉健は言っていた。」
- 2 「レイモンド・チャンドラーだろ。」
- 4 「そうです。そのおっちゃんです。父よ、あなたは偉かった。」
- 2 「何を言っているんだ。」
- 4 「死を受け入れる気持ちはいつも前のめりでありたい。」
- 4 は獯猛な表情で2に近寄る。
- 2 「近寄るな、てめえ。」
- 4 「例えそれが瞬時のことでもかすかに聞こえる耳鳴りに命を傾けたいのです。」
- 2 「近寄るな。」
- 4 「人生は走馬燈のように駆けめぐるのでなく、過ぎ去った時間がこの瞬間に正統化できればいい。あなたたちの勝ち誇った理念のない屁理屈が人の命を奪ったのです。」
- 2 「…命令だ。」
- 4 「意志です。わたくしたちはいつも押しつけられた劣等意識と戦っていました。赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を…。この文句は母親が出ていく前、アリランの咲き乱れる庭で語ってくれました。赤い傘はこの民族の良心なのだ。」

爆撃音。

- 4 「そして、あなたは〈否定の英雄〉。」
- 2 「それを言うな。」
- 4 「軍神〈否定の英雄〉殿。」
- 2 「それを言うな！」
- 4 「あなたは意志をもつて女、子供を殺しました。」
- 2 「……。」
- 4 「あなたの祖国では〈否定〉がつかない。しかし、わたしの祖国と戦後の世界がそう言い放っています。」
- 2 「おれは必死で生きてきた……。」
- 4 「あなたは上官のせいだと言い、その上官はそのまた上官のせいだという。そして、大義は全て天皇陛下のためだという。自分のせいにならないうまい仕組みです。」
- 2 「そんな時代、一個人がどうしろって言うのだ。」
- 4 「あなたもわたしも同じ種族です。同じ種族が支配して支配されている。少なくとも劣等意識を植え付ける要素などないはずです。アメリカが敷いたルールの上をただ何も考えずに走ってきたあなたたちの国に比べ、わたしたちは、まずその劣等意識をひっくり返さねばならなかった。そして、自分たちでルールを敷き世界のフィールドに走り出していかねばならなかった。あなたたちはアメリカの属国です。」
- 2 「…大義はある。しかし、アメリカと喧嘩して勝てる奴がいるか。」
- 4 「わたしの戦友に〈永世中立国〉という仇名の男がいました。そいつは決して争わないのではないのです。争い事があるといつも真っ先に飛んでいって真剣に立ち向かっていく。次第にそいつとは争いにならなくなり、いつもそこだけ平和なのです。」
- 2 「それこそ、机上の屁理屈よ。」
- 4 「理念です。製鉄の溶鉱炉のような真っ赤に燃えさかる理念です。理念のない人間などアニマルの集合体です！」

2 は 4 に殴りかかる。

- 2 「馬鹿野郎！おれは手前を見逃してやったんじゃねえか。だから、こうして生きていられるんじゃねえのか。お前はおれに感謝しないのか。こうして生きていられることに感謝しないのか。どうして、助けた奴に説教されなくちゃならないんだ。おれはお前の命の恩人だぜ。生きていられるからメシも食えるし、女ともやれるんじゃねえのか。」
- 4 「おれの母親を返せ！」
- 2 「そんなもの返せるわけねえじゃねえか。おれが売っぱらっちゃまったんだ。返せるわけねえじゃねえか。」



4 はだんだんぐったりしてくる。

3 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。」

2 は脱兎のごとく飛び出していく。

3 「そして、男と男の微妙な情念を…。」

4 「…。」

3 「憶えているか。あの時代を…あの赤い夕陽の差し込むあのアパートを…。」

4 「幸せすぎて…。」

3 「月並みなこと言うなよ。悲しいじゃねえか。」

4 「…。」

3 「はじめて出会った時のこと憶えているか。ボタン雪の舞う二丁目のあのポルノショップの前を。」

4 「憶えているよ。おれが丁度、メケメケでアルバイトをはじめたころだった。麻紀の野郎が焦げ跡つくって、そこに居合わせた客が丁度、医者で…医者っていつても（経路鞆丸科）なんて訳のわからないところの医者で、ともかく、そいつと一緒に二丁目を押し黙ったまま歩いてたわけよ。麻紀は一人で行けるからなんてその（経路鞆丸科）の医者と奥の方に消えちゃった。おれはすることもなくほっつき歩いていたら、その二丁目のポルノショップの前に来てしまった。」

3 「はじめて見かけたおまえの顔は美しかった。いつも開いている目ん玉と大きな口、そして、鳥殻のようなしなびた骨格。おれはボタン雪の舞う中、何時間もおまえのその顔を見つめていた。」

4 「おれはただその寒さに震えていた。何時間もこうしているような気がした。いや、ひよっとしたらおれは生まれる前からこうして震えて、誰かを待っていたような気がした。」

3 「おれは出来るだけ気づかれないようにおまえの前を何度も行き来していた。」

4 「十三回往復したんだ。」

3 「十三回目におまえの前を通り過ぎた時、おれはおまえに『雪が降っているね』と言った。おれはその言葉が自然に発せられたことに自分でも驚いた。おまえは『ボタン雪だ。朝になったら随分積もっているだろう』と言った。その時、はじめておれの体を凍えさせているこの雪は積もって形になるのだと確信した。丁度、自分の気持ちたちが固まっていくように。」

4 「それからおれたちは一緒に住み始めた。アパートは丁度、中村公園の裏手にある三畳一間、築三十年のオンボロ家だった。大家には共同生活者だと言ったが『まるで夫婦だね』と言われた。話のわかる男だった。」

3 「生活は苦しかったが、全てがバラ色だった。おれはおまえの体温に母親のぬくもりを感じ

じたのだ。」

3、4はしっとり抱き合っている。爆撃音。

4 「あれが全てを壊したんだ。俺たちから幸せを奪っていった、あの一通の赤紙。」

3 「鹿兒島だ。」

4 「後に残されるなんてもうたくさんだ。おれはおまえにくつついて、どこまでもいこうと心に決めた。駅で色狂いの将校をとつかまえ、まんまんと切符を手に入れた。だけど…。」

3 「おまえはあの広島駅で『おれはここで降りる』と言った。何故、降りたんだ。」

4 「風が頬に気持ちよかったのさ。」

3 「風なんかあるかい。ほかに男でもいたのかい。」

4 「男なんかいるもんかい。おれの生まれたところによく似ていたからさ。」

3 「風が頬に気持ちよかった？おれの生まれたところによく似ていた？ふざけんじゃねえぞ。…おまえと別れた、あの広島駅でおれは…泣いて泣いて…涙つてのは、どこまでも底がないのかって思わせるぐらい…ボタバタ、ボタバタ、泣いて、泣いて…あのやけにどんよりした広島駅でおれは本当にひとりぼっちになっちゃった…。」

4 「愛っていうのは生臭い日常の積み重ねなんだ。そして、いつか憎しみに変わっていく。

一緒に過ごした時間を愛だと感じたのはまだおれが生臭かったからだ。」

3 「生臭くてたくさんだ。おれは何も綺麗事を言って生きていこうとは思わない。ひとりぼっちがどんなに悲しくて、切ないのかおめえにはわかんねえのか。」

4 「おれたちはまだ幼すぎたんだ。だからおれはあのやけにどんよりした広島駅がとても大人に見えたんだ。」

3 「馬鹿野郎！」

3は4に掴みかかる。

3 「おまえって奴は！おまえって奴は！」

3は4を殴る。蹴る。

4 「やめろ！」

4は3を突き飛ばす。

4 「これじゃあまるで新国劇だぜ。」

3 「おまえから貰った一通の手紙。『おれたちは無理心中時代に咲いた野花だ。生きていた

ら漫才をしよう。』」

爆撃音。3、叫びながら走り去る。

1は4に近寄る。1は4を見下ろしている。

1「大丈夫ですか。」

4「ええ…。」

1「久しぶりですね。」

4「ええ。」

1「お体の具合はいかがですか？」

4「大分…よくなりました。随分…助かりました。ありがとうございました。」

1「…。」

1は4に傘をさしてやる。音楽I N。

4「こうして傘をさしだされるのは…あの日以来です。」

1「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。そして、雨にあたると通り過ぎた過去が見えてくるのです。」

4「歴史は時間がたてばどこか美化されてしまうものです。」

1「…。」

4「思い描いていたことが、まるで体験したことのように錯覚されてしまう。あの空から黒い雨が降った時も…。わたしはその渦中にいたかのような。」

1「渦中にいたのです。」

4「…。」

1「戦争という渦中にいた人間は全て体験者なのです。そして、その後の生々しい生き様はエクスタシー的体験なのです。」

4「…。」

1「あなたはとても傷ついていました。その体の傷よりもはるかに深い傷を抱えていたのです。そして、それは、戦争が終わってからもずっとです。」

4「あなたは何故わたしに優しくしてくれたのですか？同情したのですか？」

1「いえ、あなたの背負ったリュックサックがあまりにも大きくて、あなたの額からとめどもなく汗がながれ、その瞳はランランと輝いていました。わたしはその姿を見て、戦争は終わったのだ。これから新しい時代が始まるのだと思います。」

4「何も考えずに重い荷物を背負って歩いていただけです。そんな大義などわたしにはなく、ただ、生きていくことに執着していただけなのです。」

1「それがわたしたちの第一歩だったのです。」

4 「わたしだけではない。われわれ共通の生き様なのです。」

1 「意志です。」

4 「え？」

1 「前向きな気持ちは絶望的な敗戦から生み出されたものがほとんどでした。だけど、あなたは一貫して意志的でした。」

4 「それは…。」

1 「…。」

4 「差別とか迫害を拭い去るのには身についた血潮がそんな気持ちにさせるのです。（自嘲気味に）だからおれはいつまでたっても目つきが悪い。」

1 「差別、迫害をされたから言っているではありません！わたしはあなたという人がそんな風に考えられるあなたという人がとても素敵に思えたのです。わたしはあなたの背負ったリュックサックの重さがごく自然な体の一部に思えたのです。どこか人生の宿命的なところを象徴しているかのような…。」

4 「この国は占領された国には寛容だ。黒い雨を降らせておいて、復興させていく神経はわたしにはとても理解できない。それほどこの国は思想がないのでしょうか。」

2、登場。

2 「失礼。よう、ちょっと疲れただろう。休憩したらどうだ。」

4 「大丈夫です。さつき充分休憩しましたから。」

2 「そういえばさつき、受付に借金取りがきていたぞ。」

4 「いけねえ。」

4、あわてて去っていく。音楽 I N。

2 「やっと、二人きりになれましたね。開演してからずっと、この時を待ち続けていました。聞こえますか。この音楽、あなたのために流しています。」

1は所在なげにしている。

2 「終戦間もない広島であなたは何故、自殺しようとしたのですか？」

1は振り向いて2を見る。

1 「あなたは何故、三百六十五人の人が殺せたの？」

2 「その時の体制を考えてみれば分かります。全てが転がりだした岩のように歯止めがきか

なくなっていたのです。殺人は単なる統計値です。」

1 「自分の意志ですか？」

2 「…命令です。」

1 「あなたは人殺しをして英雄になった。」

2 「はじめて人を殺した時は罪を感じたが…そこで、戦争が終わっていたら、わたしは随分、押し黙ったままだったでしょう。しかし、時間が経ってそれが国益であると褒め称えられると、殺人が社会のためであるという認識をごく自然に持ちました。そして、人が死ぬということもただの統計値になってしまったのです。そして、その値が高くなればなるほどわたしは英雄になるのです。」

1 「何故、罪もない女、子供を殺せるのです？」

2 「殺人もただの統計値です。そこに居合わせたという運命なのです。ロシアンルーレットを知っていますか。あれは最も具現化された統計学です。」

1 「そこに居合わせたという運命で命を落とすのですか？そこに人の意志が入り込む余地はないのですか。」

2 「あなたの言うのは机上の絵空事だ。その場に居合わせた人でなければその魔界はわかりません。」

1 「戦後の日本は他国のルールで歩かされ、それが幸せだという脅迫じみた考えを押しつけられました。押しつけられた自由がそれほど幸せなのでしょうか。それは戦後時間が経つにつれあたりまえのように思われてきました。」

2 「我々は戦後を精一杯語ってきたつもりだ。」

1 「それは見下ろした体験談にすぎなかったのです。そこに居合わせなかった人たちに、もつと自分の考えを率直に言って欲しかった。おぎなりの平和論が今の日本を意志のない国にしたのです。」

2 「自分の将来が全て見えてしまい、それが嫌で岩に閉じこもって生きている妖怪がいるってきいたことがある。わたしにとって、戦後とはただ肉体が生きているだけなのかもしれない。」

1 は所在なげに立ち上がる。

2 「あなたはあの終戦間もない広島で、何を求めていたのですか？」

1 は振り向いて2を見る。

1 「わたしにはとても好きな人がいました。その人は大きな女物の帽子を被り、サンダルを履いて、ビシツとしたスーツを着て、いつも赤い傘を持っていたの。そして、赤い傘をこうくるっと回して、『赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を表す』って。」

2 「私はあなたを愛していました。」

1 「(申し訳なさそうに) 恋愛って、いつもどこか一方通行じゃないですか。どちらかが押しせば、どちらかが引いてしまうような。」

2 「何故、そんなつまらない言い訳をするのです。わたしはあなたを愛しています。あなたに対する愛は不変なのです。」

1 「何故、そんなことがわかるのです？」

2 「自分の気持ちぐらい自分でわかるでしょう。」

1 「いえ、何故、気持ちが変わらないと言い切れるのです？」

2 「…。」

1 「それがあなたという人間なのですか。それが魔界の価値観なのですか。」

2 「あなたの好きな人に会ってみたいものです。」

1 「(柄をさすりながら) 男と女の微妙な距離ってわかります？わたしの愛した人は決して愛を押しつけませんでした。いつも背中で愛を語ってくれたのです。私はどこか安心できる船着場のようなところに惹かれていくのです。」

2 「愛を表現してはいけないのですか？」

### 3, 4 登場

3 「おい、やめろよ。」

2 「愛を表現してはいけないのですか！」

3 「やめろ、この否定野郎。」

2 「何でおまえたちが出て来るのだ。おれはまだ、愛を語っている最中なんだぞ。」

4 「ぼくたちは断片的にしか物事を考えることができないのです。多分、こうだろうというような膨らませた考え方ができないのです。とても不幸で社会生活には不向きなのです。」

3 「われわれは実は兄弟なのです。別に驚きもしませんでした。一緒に生活をはじめてなるとなくそんなことはわかってきました。当意即妙というか、脊髓反射というか。もつとも、性格はまるきり違いますけど。こいつの場合、母親の胎内にいる時から脳が女性ホルモンの影響を受けていたみたいで、先天的なホモみたいですけど。」

1 「ホモってゲイのソフト版なの？」

4 「ホモは同性愛の男、ゲイは男性の男を相手にする男と、まあ、広辞苑にはでていますが、そんなことより、ぼくたちの雰囲気はなんとなくドロツとしていて(ホモ)って感じがするでしょう。ぼくはホモサピエンスってホモのことだと思っていましたよ。」

3 「人類がホモであれば、我々も辻褄が合うのだけど。」

1 「女性もいるでしょう。」

3 「いや、失礼。あなたが変なことを聞くからいけないんです。」

1 「あの日、あの時…わたしたちはここで出会いました。」

爆撃音。 1は2の方に近づいていく。

3 「おい、シートベルトをしないのは交通違反だと思うか。」

爆撃音止む。

2 「何を言っているの？」

3 「シートベルトをしないのは交通違反かって聞いてんだ。」

4 「交通違反です。減点です。」

3 「納得できるのか。」

2 「しようがねえだろう。ルールはルールだ。」

3 「交通違反ってのは交通の妨げになるから交通違反だろう。」

2 「そうだよ。」

3 「シートベルトをしないのが何故、交通違反なんだ。」

2 「はーん、さては、おまえシートベルト違反で捕まったな。」

3 「シートベルト違反で捕まったのはお前だ。」と2を指す。

2、ドギマギする。

3 「キャラクター上、おれに言わせているだけだ、この野郎。」

2 「ありがとう。」

3 「交通違反ってのは交通を妨げて社会に迷惑をかける奴を捕まえるのが目的だろう。シートベルトをしなくて社会に迷惑がかかるのか。」

2 「いいぞ。」

3 「それに、夜中の二時に人通りもないところを取り締まる駐禁も社会に迷惑がかかるのか。」

2 「そんなこともしていたの。」

3 「それもおまえだ。」

2 「ありがとう。」

3 「腹が立つなら自分で言え。」

2 「キャラクターの崩壊をおこしてはいけない。何しろわたしは屈折したダンサーなのですから。どうです？よかったら、一緒に踊りませんか。」

「トレパック」（くるみ割り人形より） I N。全員で仲良く踊る。

何故か八馬もいる。

1 「あの…よろしいですか？」

2, 3, 4, 八馬は1を見る。

4 「失礼、いつもこんな風なものですから。」

1 「お友達ですか。」

八馬 「いいえ、アカの他人です。」と走り去る。

2 「何だ、あいつは。」

1 「随分親しそうな様子でしたから。」

3 「話のながれでムキになっただけです。世の中にはそんなことが掃いて捨てる程あるじゃありませんか。」

2 「掃いて捨てる程の中身だといいたいのか。」

1 「私にはとても好きな人がいました。」

1は2から離れる。

1 「あの赤い傘をわたしにくれた人がいました。」

2 「赤い傘？」

2は4を見る。

2 「おまえはなぜこの草刈民代に赤い傘を渡した。」

4は1を見る。

4 「あなたがわたしに『あなたの一番大切なものを下さい』と言ったからです。」

2 「一番大切な物を何故、簡単に渡してしまうのですか。」

1 「いじめないでください。わたしは今、とてもいい気持ちなのです。」

2 「なに、これがあんたの船着場か。大きな女物の帽子を被って、サンダルを履いて、まれで似合わないスーツを着て、背がちんちくりんで、目ん玉をひんむいて物を言う奴があんたの船着場か。」

1 「…。」

2 「なんで、おれがこんな奴に負けなくちゃならないの。」

3 「負けるって何だ。この娘はおまえよりこいつの方がいいって言っているだけじゃないの。」



- 2 「馬鹿野郎。おれの方が背は高いし、いい男だし、それに、わしゃあ、銭持っとるけんう。」
- 3 「典型的な嫌われ者。」
- 2 「あなたのために宝石のコーワで買いました、この指輪。（と、指輪を取り出す）」
- 3 「ダイヤモンド！」
- 2 「2カラット。エクセレント。VS1。そして、日米宝石センター鑑定書付き。」
- 3 「おー、デリシヤス。」
- 2 「受け取って欲しいー、この指輪を！」

2 はまるでおれが主役だと言わんばかりに1に指輪を渡す。

1 は指輪を投げ捨てる。

- 2 「何するんだよ。給料の3ヶ月分だぞ。」
- 1 「いりません。」
- 2 「馬鹿野郎。2カラットのダイヤだぞ。」
- 1 「いりません。」
- 2 「この（アフリカの奇跡）に何故、あなたはなびかない。」
- 3 「あなたのその性格が女に嫌われるんだよ。」
- 2 「おれが振られるなんて法律はない。」
- 3 「馬には振られたことがあるのにな。」
- 2 「馬は馬だ。それにあいつは後でレズだってわかったんだ。」
- 3 「あなたは自分がどうして振られないって言い切れるんだい？」
- 2 「何てたって、おれは祖国の英雄なのだ。」
- 3 「英雄だと何故振られないんだ？」
- 2 「英雄は何をしても英雄だ。女に振られるなんてことが国家に認められている人間にあてはまるわけじゃないか。」
- 3 「おまえなあ…人の気持ちはどんなに金があったって、どんなに権力があつたって、それで思い通りになるものじゃないよ。」
- 2 「国家がおれを評価しているのに、一人の人間がおれの評価をしないとどういうことか！」
- 1 「わたしはあなたを英雄だとは思わないわ。」
- 2 「いま、何て言った。」
- 1 「わたしはあなたを英雄だとは思いません。」
- 2 「何だと。」
- 1 「ノー・モア・英雄。」
- 2 「何だと。野茂は英雄だと。おれは英雄じゃないのかい。」

3 「おまえ馬鹿じゃないの。何でここで野茂がでてくるのよ。それに野茂は英雄じゃなくてヒデオだよ。」

2 「おまえまでおれを馬鹿にしやがって。おれはついに祖国の人間にまで見放されたか。おれの正義は仇花か。おれの勲章はガラクタか。おれの人生は虫けらか！おれが恋焦がれた草刈民代はこんなにもせつないものか。戦争で生きて帰ってきて女に振られるなんて、ドンガメに落ちてクタルようなもんだぜ。よう、おまえは女にもていいなあ。」

4 「否定の英雄殿！」

2 「もう一辺言ってみろ。」

4 「否定の英雄殿。わたしはあなたを告発します。」

2 「おれを告発するだと！ホモのおまえがこの国の英雄に向かっているという言葉か。」

4 「罪状は大量無差別殺人三百六十五人。そして、セクハラ発言に対してです。」

2 「何を言っているんだ、おめえ。」

4 「わたしはあなたを許しません。」

2 「ふざけるな！」

4 「わたしはあなたを絶対に許しません。」

4 は懐からピストルを取り出す。爆撃音。

2 「ちゃんと持っているんじゃないか。撃てよ、この野郎。戦争はまだ終わっちゃあいねえよ。」

4 「全くその通り。あなたの人格は戦争そのものです。」

ピストル音。

4 「あっ！」

2, 退場。

3 「痛えー。」

4 「大丈夫かよ。」

3 「駅裏なんぞ、歩かなきゃ良かった。」

4 「まだ、かすり傷でよかったよ。」

3 「よし、もう一回いくぜ。」

3, 4 立ち上がり漫才を始める。

3 「はい、わたくし香港から来ましたトニー・タニシです。日本に来るのは久しぶり応仁の乱以来です。鬼の乱違います。応仁の乱、知っていますか。タニシも知りません。営業の言葉です。質問してはいけません。日本にくる前は日本のはるか南、香港よりも南、ミャンマーのアン・サン・スー・チー女史の前でライブをしてきました。アンサン寿司、違います。りっぱな政治家です。アン・サンとても喜んでくれました。こうして頬ずりしてくれました。タニシ、思わず漏らしそうになってしまいました。もちろんワタシ一人でライブをしたのではありません。素敵な相棒がいます。わたしの小学校の幼なじみ、タン・ヤン・ヤンです。」

4 「ハハハ。」

3 「ヤン・ヤンはとても笑い上戸です。」

4 「ハハハハ。」

3 「何見ても笑います。」

3 は懐からクシを取り出す。

4 「ハ・ハ・ハ。」

3 はクシで髪をなでつける。

4 「バ・ハハハ。」

3 は1を連れてくる。

4 「ガ・ハハハ。」

1 は4をひっぱたく。

4 「(力無く)ハハハ。」

3 「ヤン・ヤンはとても笑い上戸です。」

4 は笑顔を絶やさず胸を張っている。

3 「ヤン・ヤンはまた占いの名人です。」

相変わらず4は笑顔を絶やさず胸を張っている。

3 「それでは質問します。日本の宝・正倉院、この後どうなるか？」

4 「売らない。」

多分、客席はシクンとしている。

3 「正倉院：売らない。おかしい、アン・サン・スー・チー馬鹿受けだった。ここは黄泉の国、タニシとても悲しい。」

4 「ハハハ。」

3 「笑わなういでください。タニシ、本当はとても泣き上戸です。悲しい。日本に来るんじやなかった。うちの母親にも止められた。アジアの通貨危機、みんな人の国のせいにする。タニシ、とても悲しい。」

4 「ハハハ。」

3 「もつと心の底から笑え！」

4 「ハハハ。」

3 「いいか。おれたちはおれのしゃべりとおまえの肉体で成り立っているんだ。おめえは馬鹿みたいに突っ立て笑われ者になつてりやいのよ。」

4 「おれは笑われ者か。愛が憎しみに変わるつてのは本当のことだね。」

3 「何を言っているんだ。おまえはおれを愛してないのか？」

4 「愛しているよ。」

3 「おまえは少しずつ変わっちゃった。あの戦争のせいだ。」

4 「何で戦争のせいにするんだ。どんな状況だって愛し続けるのが本当の愛じゃないのか。おれは戦争があつて、こんな体になつちまった方が良かったような気がするよ。でなけりやおれたちの愛はもつと早く終わっていたような気がする。」

3 「何を言っているんだ、てめえ。」

4 「おまえはおれを利用していただけだ。」

3 「うるせえ。」

3 は 4 を殴る。

4 「そうやって、すぐ殴る。そういうのを癩癩持ちって言うんだぞ。」

3 「そうやって、ずくと言っているよ。おまえのベクトルはいつも後ろ向きだ。」

4 「ベクトルって何だ？ 怪獣か？」

3 「おまえが後ろ向きだって言っているんだよ。」

4, 後ろ向きに歩く。

3 「馬鹿か、おまえ。後ろ向きにいつも歩いている人間がいるか。」

4 「おれはおまえに愛されたくて一緒にいるだけなんだぞ。怒鳴られるために一緒にいるんじゃないんだぞ。」

3 「おまえはおれにこう言った、『愛っていうのは生臭い日常の積み重ねなんだ』。おれはあれからひとりぼっちで汽車に揺られていた。静かな旅だった。ちようど、熊本を過ぎて、もうじき鹿児島だって時に、おれはぶるぶる、ぶるぶる震えてきた。一人は嫌だ。おれはこの汽車から飛び降りて引返そうと思ったんだ。だけど、車内は寿司詰めで、おれのそんな気持ちなど押し潰していく…ぎゆう、ぎゆう、ぎゆう、ぎゆう押し込んで、おれの気持ちまで押し込んでいく…おれたちはそんな中でしか生きていけなかったんだ。」

4 「ハハハハ。」

3 「馬鹿野郎！笑うっていうのはなあ、心の底から笑うんだ。『ハハハハ』（笑ってみせる）そうすると自分でも意味もなく可笑しく思えてくるのよ。それが笑いだ。そこから今度は客の空気を掴む。ここにくる客っていうのは最初から笑いに来ているんだ。それを、ある時、膨らんだ風船を針で刺してやるみたいにドカンとやってやるのよ。もう、そうしたら、こっちのものよ。あとは何したって笑ってくれる。」

4 「要は真剣に笑うってことだね。」

3 「要はそういうことよ。『ハハハハ』。」

4 「ハハハハ。」

3 「ハハハハ。笑われ者には笑われる理由がなければいけない。そして、その笑われるに値する人間だけが真の笑われ者になるのだ。」

4 「我々は笑われ者か。ハハハハ。タニシ、おれは嫌だぜ。真の笑われ者なんて骨の髄まで笑われ者だぜ。真の笑われ者は笑われる人生しかないんだぜ。それで幸せだと言えるのか。」

3 「笑われるだけで生きていけるなんて素敵なことだ。ハハハハ。」

4 「ハハハハ。ハツハツハツ、ハクシヨシヨシ。」

音楽 I N。ハクシヨシ大魔王に扮した八馬、花道より登場。

八馬 「お呼びでございませうか。」

3 「何だよ、こいつは。何でこんな奴が出てくるのよ。」

八馬 「大変、長らくお待ちせしました。わたしが八馬寿次郎です。受付、客入れ、そして、この後のアンケートのお願い、お客さまのお見送りまでやらせていただきます八馬寿次郎でございます。」

3 「何しに来たんだよ。」

八馬 「わたしも劇団員です。そして、事務局長と会計をやっております。そんな人物を簡単にキャスティングから外していいのでしょうか。」

3 「代表に言え、代表に。」と奥を指さす。

八馬 「第二回世界反復横飛び選手権。」

音楽 I N。

4 「何で、反復横跳びやるの。」

八馬「赤コーナー、百二十ポウンド二分の一、ツープラトンの突っ込み、得意技はつまらない駄洒落。」

3 「シャイな斜位。」

3 はポーズを決める。

八馬「青コーナー、百十ポウンド二分の一、ツープラトンのボケ、得意技は気張り。」

4 は気張っている。

八馬「青、有利。レフリーはわたくし八馬寿次郎が務めます。それでは第二回世界反復横飛び選手権、制限時間は二十秒。よいい、はじめ。」

一同、一斉に反復横飛びを始める。

4 「ちよつと、なぜ、おたくも一緒にやるの？」

八馬「体を張った漫才を体现するためにはそれを評価する人間も体を張らなきゃいけないのです！」

3 「よく、わかんねえな。」

八馬「はい、二十秒。」

3 「で、誰が数えんのよ。」

1, 2, 登場。

八馬「第二回世界反復横飛び選手権、第二ラウンド。赤コーナー、ツープラトン、得意技は赤裸々なホモ。」

3, 4 は赤裸々なホモのポーズをする。

八馬「青コーナー、その合わない二人。」

いかにもうまくいきそうもない1と2。

八馬「よーい、はじめ！」

一同、一斉に反復横飛びを始める。  
2は何やらわけのわからないことを言っている。そして、3に体当たりする。

3「ふざけるな、この野郎。おまえ、おれと勝負しろ！」  
2「おお、上等じゃねえか。こい！」

2, 3. タイマン勝負。

八馬「はじめ！」  
1, 4「いけー！」

2, 3反復横飛び開始。2はまたわけのわからないことを言っている。1は2, 4は3の回数を数える。

八馬「それまで！」  
1「三十五！」  
4「四十！」

3, 4、ガッツポーズ。

八馬「これにて終了。」と花道を去っていく。

2「ふざけるな、ホモ野郎。」  
3「何だこの野郎。もう一遍、言ってみろ。」  
2「ホモ、ホモ、ホモ野郎！」  
3「おまえ、反復横飛びで負けたぐらいでムキになるなよ。」  
2「うるさい、おれは負けるのが大嫌いなんだ。」  
3「てめえはそれでも英雄か。」  
2「おれが英雄だって名乗ったわけじゃねえ。」  
3「いいじゃねえか。勲章も恩給ももらえるんだろう。」  
2「おまえたちにクソ馬鹿にされて英雄の値打ちがあるか。」  
1「あなたはそうやって、急に謙虚になったり、威張ったり。自分で自分をいつも疑っている。」

2 「そういう人間は嫌いなのでしょう。」

1 「ええ。大嫌いです。」

2 「おれは戦争の英雄なんだ。おれの価値観は国家が保証してくれる。」

4 「あなたの愛は誰にも理解されません。」

2 は振り向いて4を指さす。

2 「よく憶えておけ。戦後の加害者の被害者意識でおまえたちへの思いが来上がっているんだ。」

再び、八馬、登場。

八馬 「えー、ここで解説です。『加害者の被害者意識』、これは例えば、調子に乗って、いじめ倒したのはいいけれど、後になって、『あつ、ちよつと、やりすぎたな。悪いことしたな』って、思うことです。人はこういう気持ちになることによって反省するのです。」

2 「もう、ふざけるのはそのくらいでいいだろう。おれの我慢も限界にきている。おまえたちにクソ馬鹿にされてこんな芝居やっていられるか。」

八馬 「こんな芝居をつくったのはあんたじゃないのか。」

2 「おれはまだ、言いたいことの半分も言っていないんだ。しかし、今日、ここに観に来てくれたお客さまはとても忙しい身であるからして、いつまでも、こんな芝居につきあっている暇はないだろう。」

八馬 「あつたりめえだ！てめえ、何年、芝居やっているんだよ。」

2 は恐ろしい目で客席を睨み付ける。

2 「あと、十五分。十五分でけりをつける。」

八馬 「いいでしょう。十五分待ちましょう。十五分きっかりになったら、わたしはカーテンコールに登場します。それまで決して邪魔しませんから思う存分やってください。」

八馬は悠然と立ち去る。

2 「では、話は戻って『加害者の被害者意識』からだ。（4に）よく憶えておけ。戦後の加害者の被害者意識でおまえたちへの思いが来上がっているのだ。」

4 「忘れるということは神が与えた最高の財産だが、悪用してもらっては困ります。忘れちゃならないことは何があつたって忘れてもらっちゃ困ります。忘れそうになった時は太ももにキリでも刺して目を醒ますといい。この太ももの痛みが心の痛みだと。わたくしは朝鮮



という響きが大好きです。朝焼けの鮮やかな様のようなイメージもあるし、本当の歴史もあるような気がします。よく漬かって熟したキムチみたいに、味が濃くて深いです。(在日) というのは民族の問題から見ても、国家の問題からみても矛盾の固まりみたいなもので、それを一挙に片づけようとする时必须行き詰まってしまう。しかし、その矛盾をじつと抱えて、百年、二百年と過ごせば、非常にいい熟し方をしていくような気がします。」

2 「百年、二百年も生きちゃあいねえぜ。」

4 「時代は永遠に続きます。わたくしたちの次かその次の世代にはこの国も熟したいキムチになっていることでしょう。」

2 「おれはキムチより熟したい女になってくれた方がいいけどな。」

4 「人はいつも間違いを繰り返します。時代はいつも悩み続けています。」

2 「おれたちの過去も精算できるのか。」

4 「わたくしたちの次か、その次ぐらいには。考えてもみてください、一つの民族だけで成り立っている国なんてごく僅かしかないってことを。」

2 「おれの罪も消える日が来るのか。魔界の人間に第二ラウンドはないのか。」

4 「あなたが真の〈否定の英雄〉になった時、わたくしの家族も浮かべられます。」

2 「おれが連れ去ったおまえの母親は笑顔を浮かべる時が来るのか。」

4 「わたくしたちの次か、その次ぐらいには。」

1 は傘を持ち広げる。

1 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。そして、雨にあたると通り過ぎた過去が見えてくるのです。」

4 「行きます。」

3 「待て、どこに行くんだ。」

4 は敬礼し、そのまま立ち去ろうとする。

2 「よう、代議士！」

4 は振り返る。

2 「自殺するな。」

4 は無表情に2を見つめている。

2 「生きて祖国を語れ。」

4 「わたくしは祖国も漫才も捨てて代議士になりました。」

2 「祖国は捨てたのではなく、愛したのだろう。」

4 「愛せば愛す程、せつなくて、苦しくて、自分の居場所が見つけられなくなるのです。」

2 「…。(優しく) 自殺するな。生きて祖国を語れ。」

4 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。そして、母親から教わった、この赤い傘は民族の心なのだ。」

3 「どこに行くんだ。」

4 「ちよっと風に吹かれてくるだけです。」

4 はそのまま立ち去ろうとする。

3 「イマイ、死ぬな！」

4 は立ち止まり、敬礼する。

4 「わたくし、朝鮮から帰化しましたイマイ・シヨウケイはこのままここを後にします。わたくしは朝鮮から帰化しましたが、それを隠そうとは毛頭思っておりません。わたくしは何もやましいことはしておりません。先の大戦を戦い、広島で被爆し、真の笑われ者にならんとするために漫才師になり、そして、みなさんの熱い期待に答えて代議士に当選しました。わたくしは何もやましいことはしておりません。わたくしは朝鮮人です。朝鮮人の鮮やかな様を思い浮かべるような朝鮮人です。私はいま、祖国を遠く離れ国籍も変わりましたが純然たる朝鮮人です。この日本がさまざまながらみを取っ払い、そして、それがうまく融合していけるのはわたくしたちの次かその次ぐらいでしょう。しかし、そのための道標をいまこの朝鮮人が身をもって示していかねばなりません。わたくしの母親は殺された国の人間になったとしたら泣くでしょうか。いえ、決してそうは思いません。殺された国に目を開かせてやるのが一番の復讐だと傲然と胸をそびやかせて言うでしょう。赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。そして、この赤い傘は民族の心だ。」

42

1 は傘をさして4 に近づいていく。

4 はそれを振り払うかのように立ち去ろうとする。

3 「死ぬな、イマイ！」

4 「わたくしにはとても愛した人がいました。草刈民代に似たその人をわたくしはいつも遠くから見守っていました。決して朝鮮人だからそう思ったものではありません。わたくしの中にある一片の清い心があの草刈民代に一M以内に近づくなと命令するのです。わたくしの国はあなたの国に多くの犠牲を強いられました。わたくしは同じ事をして復讐してや

ろうとは毛頭思っていない。やはり好きな人はいつまでも見守っているべきだと思いません。わたくしの言うのは古い価値観だということはわかっております。そんな人はいないとされることは百も承知しております。しかし、わたくしの唯一の良心がああ草刈民代を見守って続けたいと命令するのです。あのアリランの咲き乱れるならかな小徑を振り取り、振り取り去っていったわたしの母親は二度と戻ってくることはありませんでした。例えば半径一M以内に近づいた男と全てそういう関係をもったとしても、わたくしの母親に変わりありません。あの赤い傘は民族の良心だと胸を張って言うでしょう。わたくしイマイは今、ここを後にしますが、あの毅然とした母親は永遠にわたしの心に生き続けていくことでしょう。」

3 「死ぬな、イマイ！」

2 「イマイ、アリランなんて花は存在しないんだ。おまえの見たのは野に咲く白い草花だ。」

4 「いきます！」

3 「イマイ！」

4、敬礼して立ち去る。

2 「私はあなたをととても愛していました。戦争の英雄だろうが何だろうが気持ちを通じないのは悲しいことです。」

1 「あなたは恋愛など戦争に比べたらとるに足らないものだと思っているのでしょうか。」

2 「…それでも気持ちを通じないのは寂しいことです。」

1 「愛せないことがどんなことかあなたはまるでわかってない。背中を押され続けて、その強迫観念で怖くなっていく…。」

2 「迷惑ですか。」

1 「迷惑です。」

2 「わたしのことが好きだったら背中を押され続けても迷惑じゃないでしょう。」

1 「あたりまえでしょう。」

2 「だったら背中を押され続けられるのが理由ではなく、好きじゃないから背中を押され続けられるのが迷惑なのでしょう。」

1 「…英雄は押しつけられた価値観かもしれません。しかし、人の心は押しつけられてなびくものではありません。」

2 「英雄が押しつけられた価値観だと。おれたちは体を張って前線で戦ってきたんだ。おまえみたいな女に何が分かる。」

1 「わたしたちも戦ってきました。私たちは日本のお役所から軍需工場で働いてくれと言われ、学校を卒業するとすぐ、夜汽車で遠い異国に連れていかれました。私たちは騙されました。有無を言わさず強制的に…。将校、下士官はまだいい方。兵隊さん相手はいつも満員です。こんな非人道的なことを中国人や朝鮮人に平気で押しつけ、五族協和だの、新満州国建

設だのって叫んでいた国の英雄が真の英雄なのですか。私たちは共に陛下の赤子として戦った人間として認めてもらえないのですか。私たちは祖国の歴史の恥部なのですか。前線にいることだけが戦争ではないのです。そして、わたしは英雄でも何でもありません。同じ戦争を戦って何故、あなただけが英雄なのです。わたしにはとても好きな人がいました。その人は大きな女物の帽子を被り、サンダルを履いてビシツとしたスーツを着て、赤い傘をこうくるっと回して、『赤は情熱、恋の色、柄の長さは男と女の微妙な距離を…』。そして、海に向かって自分の手をかざし、いたわるようにその手をこうゆっくりさすっていたの。」

2 「話をすり替えるな。おれはあんたに愛されないことを嘆いているのに何故おれの価値観まで問題にされなければいけないんだ。わたしはあなたを愛しています。わたしは戦争の英雄なんでしょう。英雄っていうのは何をしても英雄なんでしょう。誰が一体、おれを英雄にしたんだ。おれが自分で英雄だって名乗ったわけじゃないぜ。おれだってあの草刈民代を遠くから見つめていたかったんだぜ。だけど、おれは英雄なんだろう。おれの身分は国家が保証してくれているんだろう。国家がおれを認めているのにどうして自分の思いがかなえられないんだ。」

3 「おい、いい加減にやめろよ〈否定〉の旦那。」

2 「何だと！」

3 「愛っていうのは生臭い日常の積み重ねなんだ。この人はおめえのことが好きじゃない、ただそれだけなのよ。戦争の英雄だろうが何だろうが、おめえのその暑苦しい性格が好きじゃないのよ。おめえは…甘えているんだよ。」

2 「何だよ、お前たち。寄つてたかつて何なんだ。おれは必死で生きてきたただけだぜ。おれは生きていちゃいけないのか。おれの心は愛しちゃいけないのか。好きな女と出会っておれはそいつに好きだって言っちゃいけないのか。おれが罪を背負ってなければ、おまえたちは納得しないのか。おれは恋焦がれた草刈民代に似たい女にこう言っちゃいけないのか。綺麗だったね。笑顔が素敵だったね。愛はトリワケ、カクベツな理由あつて思うのではありません。愛は愛を感じた時にはじまるのでしょうか。人は愛によって目覚め、傷つき、成長していくのでしょうか。わたくしは日本の戦後を背負っております。それも愛ゆえにいとおしみに憎しみ、抱きしめたくも思うのでしょうか。わたしは祖国を愛し、一人の女を愛しました。わたしは愛に生きたいのです。」

1 「わたしは『戦争被害に関する公的調査会』を設置するための法案の制定を求めます。日本はまだ、愛を感じておりません。そして、わたしはあなたを愛せません。あなたはいつまでたっても〈否定の英雄〉のまま。」

3、近づいてくる。

2 「おれは〈否定の英雄〉なんかではない。」

1 「赤は情熱、恋の色。柄の長さは男と女の微妙な距離を。そして、雨にあたると通り過ぎ

た過去が見えてくるのです。」

3 「おれたちはここではじめて出会いました。後になってみれば思い出すこともない出来事かもしれないですが、これからの人生でいつまでも憶えていることのような気がします。ひょっとして、生まれ変わってからでも…。ほら、人生ってどこか宿命的なところってあるじゃないですか。おれたちはこの時代にたまたま居合わせて、たまたま居合わせた人と出会うだけけど、その中で生き方が変わるような出来事や人間に遭遇していくわけじゃないですか。自分が生きていると感ずるのはちやうど、そういつた渦中にいる時なのでしょう。」

1 は傘をさし、ゆっくり後ろに向かつて歩いていく。3 は追いかけてようとするが、途中で立ち止まり去って行く。空からは黒い雨が落ちてくる。ゆっくりと、情念豊かにしつとりと、まるで人間に覆い被さるように。2 は次第に体が震え、声に成らない嗚咽を吐く。そして、しだいに体が大きく震え、それが無音の大泣きに変わる。まるで、体内の矛盾を吐き出すかのような苦悶の表情。そして、後ろの幕が開き大きな階段が現れる。1 はごく自然にその階段を登り始める。彼岸にいつてしまうようにも、ごく自然に此岸を歩んでいるようにも見える。ただ、はっきりしていることはその姿がとても意志的だということだ。女の影は次第に小さくなり、後には苦悶の男と黒い雨だけが残る。暗転。

1 「大丈夫ですか？」

2 「ええ。」

1 「大分、長いことそうしていましたから。」

2 「ええ…：そういえば、漫才師の方は？」

1 「たったいま帰ったところです。あなたがとても具合悪そうで随分心配していましたけど…：どうしてもしなければいけないことがあるそうで。」

2 「ああ、そうですか。それと…：公園の主、キング・オブ・キングって。」

1 「キング・オブ・キング？」

2 「ああ…いや…わたしは何か…とても…悪い夢でも見ていたような。以前にあなたと出会って、何か一方的に言い争って、頭ごなしに決めつけたり、なじったり、大声をだしたり…。」

1 「…人生ってどこかいろんなところで交わっていくような気がするんです。ただ、自分で見たことだけが人生じゃないって。ほら、よく、言葉では言い表せない喜びとか悲しみって言うでしょう。それはきつと自分の中で交わった人生を思い描いている時だっと思っうの。」

2 「あの。」

1 「何か？」

- 2 「あなた、草刈民代って知っています？」  
1 「いえ。誰です？」  
2 「いや、いいんです。また、よかったら会ってもらえませんか。」  
1 「え、ええ。そうですね。また、ここでこうしてこんな風にしていたらお会いすることもあるかもしれませんね。」  
2 「そうですね。じゃあ、ぼくは毎日、ここでこんな風になっているかもしれませんよ。」  
1 「ええ……。」  
2 「すいません。変なことを言っ……。」  
1 「いえ。」  
2 「それじゃあ、また、どこかで。」  
1 「そうですね。また、どこかで。」

2は走り去ろうとするが立ち止まり、振り返る。1は大きく傘をかざす。2はそのまま走り去る。かざした赤い傘が輝き、これからの時間を照らしているかのように見える。いつまでもこの赤い傘に見守られていたような……。

おわり

〈参考〉野村進『コリアン世界の旅』講談社

菅原幸助『初年兵と従軍慰安婦』三一書房

西口卓男 コント「相撲」

旧日本軍による性的被害女性を支える会

より、一部を引用させていただきました。陳謝。